村上春樹雑文集 新潮文庫 平成23年1月

ジャック・ロンドンの入れ歯

ストーンの『馬に乗った水夫』を読んでとても感心した個所がひとつあった。それは彼が日露戦争の従軍記者として単身朝鮮半島に渡ったときのことである。ロンドンは持ち前の冒険心で、外国人などほとんど足を踏みいれたこともないような朝鮮北部の辺鄙な村に泊まった。村の役人が宿にやってきて、彼に丁重に挨拶をした。お疲れのところを誠に申し訳ございませんが、村のものたち全員が御尊顔を拝したいと申しております。もしよろしかったら、広場でみんなにお顔を見せてやっていただけますか、と。

ロンドンは非常に驚き、かつ喜んだ。当時アメリカとヨーロッパでは彼の文名は急速に高まっていたが、まさかこんな朝鮮の寒村にまで名が知れわたっているとは思ってもみなかったのだ。たしかに広場は村人たちでぎっしりと埋まっていた。すごい人気だとロンドンは思った。しかし彼が用意されたお立ち台に立つと、役人がこう言った、申し訳ありませんがちょっと入れ歯を外して見せていただけますでしょうかと。人々が見たがっていたのはジャック・ロンドン本人ではなく、彼の入れ歯だったのだ。村人たちはそれまで入れ歯というものを一度も見たことがなかったのである。おかげで彼は三十分のあいだ観客の熱烈な拍手に応えて、お立ち台の上で入れ歯をはめたり外したりする羽目になった。

その時ロンドンは心底こう思った、「人間がどれだけ死力を尽くして何かを追求したところで、その分野で人々に認められるのは稀なことなのだ」と。彼はそう肝に銘じながら寒風吹きすさぶその広場に立って、村人たちに向かってにこやかに入れ歯を見せ続けた。

これを読んで僕は、ロンドンという人は本当に偉いと思った。感動さえした。もちろん腹も立てずそのまま半時間も入れ歯を出したり入れたりしていた親切さも相当偉いと思う。顎の筋肉だってずいぶん疲れたことだろう。しかし僕がそれ以上に感心したのは、その教訓の学びかたであった。もし千人の人間がまったく同じ立場に置かれたとしても、そこからこんな特殊な教訓を引き出せる人は彼の他にまずいないのではないだろうか。

しかし考えてみればまあそのとおりだよな、と僕も思う。人は何かに向かってたとえ血の滲むような努力をしても、必ずしもそのことで他人に認められるとは限らないのだ。それはたしかに人が肝に銘じておいていい事実であるだろう。僕はこのエピソードを読んで、ジャック・ロンドンという作家が以前にも増して好きになった。

教訓の得かたに関して言えば、それほど劇的ではないにせよ僕にも似たような経験はある。大学生の頃、僕は一人で寝袋を担いで方々を旅行して回っていた。ある年の秋に青森を旅行した時のことだが、山の中を歩いているうちに道に迷ってしまった。夕方になり、気温もぐっと下がってきた。今にも雪が降りだしそうな嫌な天気だった。これはちょっと困ったことになったな、と僕は思った。でも運良くそこを通りかかった営林署のジープにお願いして公道まで乗せてもらい、そこからヒッチハイクで町にたどりつくことができた。僕を拾ってくれたのはマイクロバスで、そこには十人ほどのおじさんの団体が乗っていた。小さな会社の社員旅行か、あるいは町内旅行という感じの団体で、みんな酒を飲んで楽しそうに騒いでいた。おじさんたちは僕に親切にしてくれた。学生さんまあ一杯飲みなといって、日本酒を勧めてくれた。断るのも悪いので、一杯だけ頂いた。でもたぶんぐったりと疲れていたのだろう。すぐに僕はうとうとと眠りこんでしまった。

少したってふと気がつくと、おじさんたちはみんなで僕の悪口を言っていた。学生は気楽でいいや、親の金で遊び歩いてよとか、厚かましい野郎だぜ、酒まで飲みやがってだとか、そういうことだった。どうやらバスの中の全員が僕のことを罵っているようだった。困ったなと思ったが起きるわけにもいかないので、僕はそのまま寝たふりをしていた。そして悪口が一段落して少したったあたりではっと目を覚ましたふりをした。それから何事もなかったようににこにこと談笑して、町に着くと「どうもありがとうございました」と頭を下げてバスを下りた。おじさんたちも「まあ、頑張ってやれや」と言ってくれた。

まだ若かったし、僕はそのことで傷つきもした。どうして自分があのおじさんたちにそんなに罵られなくてはならないのか、その理由もわからなかった（今でもよくわからないが、あるいは僕には何か人の気にさわるようなところがあるのかもしれない）。でもそれについてはあまり深く考えこまない方がいいだろうという気がした。そしてこう思った、「他人が自分の悪口を言っている時は、寝たふりをしてるのがいちばんなんだ」と。

こういうのも教訓の引き出し方としてはあるいは正統的ではないかもしれない。でもそれは実にその時の僕の実感だったのだ。寝たふりをするのもけっこう疲れたけれど、でもあの場合には結局それがいちばん正しく妥当な選択だったかもしれないと僕は思った。

その後の人生においても何度も似たようなことはあった。その度に、なんだこれはあの時のバスと同じじゃないかと思った。そしていつも寝たふりをしてやり過ごした。もちろん黙って見過ごせないことも幾つかはあった。でも僕の経験からいえば、そんなことはそう頻繁には起こらない。大抵のことは、寝たふりをしているうちにどこかにすっと通り過ぎていってしまった。あのマイクロバスの団体おじさんと同じように。

僕は思うのだけれど、個人的教訓というのは得ようと思って得られるものではない。それは不可思議な道筋を通ってかなり唐突に頭上から落ちてくるものなのだ。そして道筋が不可思議なものであればあるほど、それに比例してその効用もまた大きいように思える。そういう教訓にどれほどの一般性、普遍性があるかまでは知らないけれど。